

75

穴戸錠

74歳 俳優

大切なのは全国民と向き合った広報

今年12月で75歳を迎え、自身も長寿医療制度の対象者となる穴戸錠さん。会社員でもなく、リタイアをしているわけでもない。今でもまだ現役俳優という立場から、今回の制度をどのようにとらえているのであろうか。

「しっかり生きなさい」という
団塊世代へのけん制？

今年4月から導入された長寿医療制度について、開口一番、「自分たちの世代にこの制度が必要かどうか考える間もなくスタートしたというのが第一印象。特に、後期」といわれることで、姥捨て山にでも連れて行かれるような意味合いにも聞こえた」と物申した穴戸錠さん。

穴戸さんは若かりしころ、母方の祖母の面倒を見ていたことがあった。しかし、まだ祖母の長男である叔父が健在なのに、なぜ孫の自分が面倒を見ないといけないのか、と疑問を持ち、「長男に見てもらってくれ」と伝えた経験がある。「今回の医療制度を聞いて、そのときを思い出しましたよ。まさに、自分がお年寄りにやったことが、自分の身に跳ね返ってきたと。そう気付いたとき、とても反省した」と話す。

制度の内容は如何にせよ、もし政府が伝えるように、今後の医療を改善する制度であるならば、ここまで問題にはならないはずだ。そのアナウンスの方法に落ち度はなかったのだろうか。

「きちんと情報を出してきたと政府はいうが、国民に届いていなければ意味がない。該当する75歳以上だけではなく、全国民への発信をしないと、根本的な解決にならないだよ」

医療制度は国民のための保険なのだから、国民全体で支える必要がある。そして、今度支える世代も世代交代する。だから、勤労世代はもちろん、その世代よりも若い人たちも、医療制度を理解する必要があるはずなのだ。

「結局、75歳以上の人だけに、とりあえず理解してもらおうとか、決まったことだからと押し付けるのでは、この制度の意味がないわけ」

さまざまな波紋を呼んでいる制度だが、穴戸さんはこの混乱が、逆に国民

全体への啓発になるのでは、と考える。

「この制度をいい意味でとらえれば、国民の3分の1にあたる、4500万人の団塊世代へ、年齢を重ねると医療費など、大変になりますよ、というけん制かもしれない、と思うんだよ」

75歳以下の年代は、来るべき扶養家族から外されるタイミングに備え、現状の医療制度がどういう状況なのか、自分はどうなのか、自分たちが支払っている保険料は正しく使用されているのかを、今一度考えることになる。

繰り返しの情報提供はもちろん 反応を制度に生かす広報が必要

とはいえ、今回の制度、該当する75歳以上の世代へも、正しく伝わっていかどうか疑問に残る。その世代へ広報するために、最適な伝達メディアの選定、伝達内容の検討はなされたのだろうか。同世代の代表として、穴戸さんに、日々の情報源について伺った。

「時間があれば、『ニュースウォッチ9』『NHK総合』『報道ステーション』（テレビ朝日）と『ワールドビジネスサテライト』（テレビ東京）など、午後9時から11時ごろまで、テレビニュースをしっかりと見るね。あとは、ニュースで得た時事情報を自分の頭で考え、酒の席で、本音で意見しあうことが、最良の情報収集になっているね」

穴戸さんを含め、75歳前後の世代は、繰り返し情報に接触し、情報を正しく理解しようという心がけている。また、この世代は話したいことがたくさんあるため、他の人とコミュニケーションを持つ場所がとても重要なのだ。

「『こと』と思ったマーケットには、とことん情報を投げて話し合わなければ、広報したい内容はその人たちには届くはずがない」と穴戸さんは話す。

75歳前後の世代への広報においては、情報の接し方を詳細に検証する必要があるといえるだろう。

しじど・じょう
1933年12月6日生まれ。俳優。1945年日活撮影所ニューフェイス第一期生。1955年『警察日記』デビュー以来、テレビ、舞台、ラジオ、CM、講義公演、小説の執筆に至るまで幅広く活動。今年75歳を迎える後期高齢者医療者制度の該当者。

情報の繰り返しと
充実したコミュニケーションの場を！

